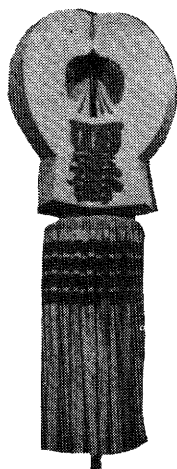


昭和57年 3月 1日

郷土あれこれ

郷土館だより
第 1 号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607



大火の記録と消防具の話

(1) 江戸時代の火事

地震、雷、火事、おやじ、というけれど、火事は一番恐ろしい。江戸時代の五日市は市場町として家なみが続いていただけに火事は大火になりやすかった。わら屋根、杉皮屋根が軒をつらねていたのだからたまったものではない。そのうえ被災しても保険制度がないから打撃は深刻である。火元の家は怨みの的になり、孫子の代まで語りつがれるのも致し方ないことであるが、被災したすべての家が再建されるまで、自分の家は建てられないなどという慣行もあり、一家離散、村を立退くといった悲劇も生じた。

この町史の年表は、たまたま手にした古文書、古記録より集録したもので、実数は、はるかに上回ろう。享保3年の火事は青梅の谷合日記に記載されていたもので、五日市宿焼亡と書かれていた。全滅状態と推測される。焼あとに茫然とたたずむ町人、もうこれで、五日市も当分は駄目だなという近隣の村人のつぶやき等が目にかかび耳にきこえる。明和7年には町の中央の炭間屋街が、春と秋二回焼けている。やっとの思いで、家を建て直したとたんに、また焼け出された人々の胸のうちはどのようであったろうか。

明和7年も安永5年も火事の直後、檜原、養沢村から炭を伊奈市へ出荷したいという願書が代官所に出されている。五日市宿は市場の機能を喪失したとみなされたのである。かねて五日市の炭問屋の専売制になやまされていた山方生産者が機をみて起した専売打破の動きである。

江戸時代 大火年表(五日市町史より)

享保1 (1716)	12. 2	伊奈宿北側残らず焼失
享保3 (1718)	12.25	五日市宿焼亡
享保12 (1727)	6.28	五日市火事
明和7 (1770)	3.10	五日市中宿下宿焼失
同年	9.14	同所 焼失
安永5 (1776)	5.16	五日市宿並大火
安永6 (1777)	4.20	広徳寺焼失
天明4 (1784)	1.24	高尾大光寺焼失
同年	1.27	五日市宿残らず焼失
天保1 (1830)	12. 7	戸倉・小中野・五日市・小和田 ・留原・高尾焼失

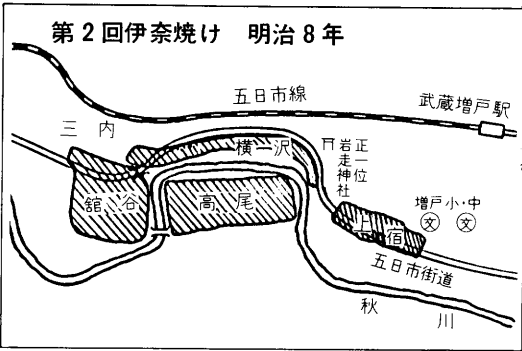
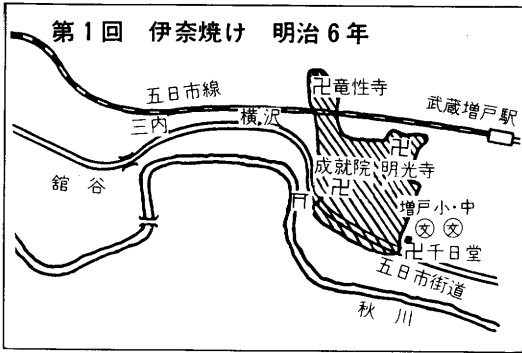
この請願は代官所が抑えてしまい体制変更は認められなかった。それにしても度重なる大火の中から不死鳥のごとくよみがえる五日市の町人のエネルギーも大したものである。

(2) 明治期の大火

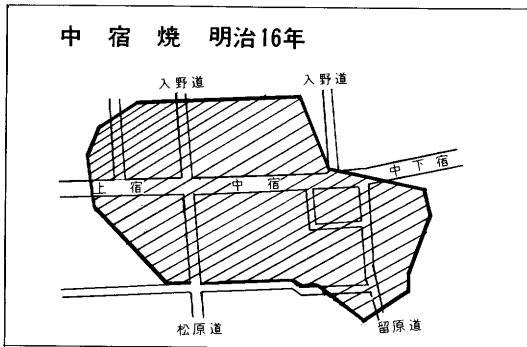
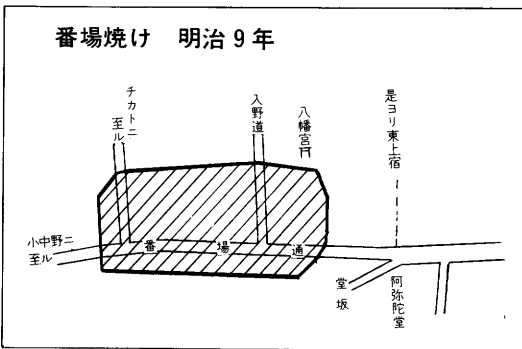
明治に入ると、伊奈村にも記録に残る大火があった。明治6年俗に伊奈の大焼けなどと呼ばれる火事が発生し

明治時代大火年表

明治6・7・14	伊 奈 焼 け	上宿・上伊奈
明治8・2・7	伊 奈 焼 け	上宿・横沢・三内 ・高尾・館谷
明治9・8・7	五日市市場焼け	28 戸
明治16・5・20	五日市仲宿焼け	78 戸



伊奈焼け作図溝口重郎氏 鉄道・学校は現在のもの



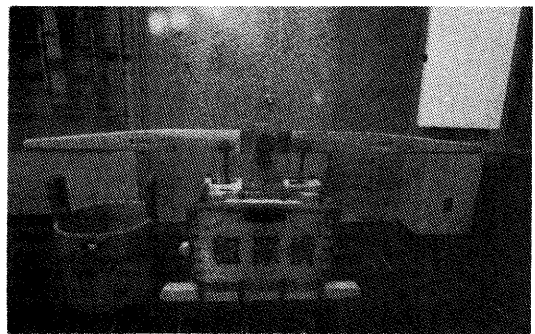
番場・仲宿焼け作図故森田秀寿氏 五日市町史より転載

た。溝口重郎氏の調査によると伊奈上宿より出火し、上宿と上伊奈の大半を焼尽している。お寺さんも竜性寺、明光寺、成就院が焼失した。そしてその後1年半程で再び上宿より出火、この時は横沢方面へ飛火し、三内、高尾、館谷まで類焼、合計百棟近い建物が灰になった。横沢の人で、伊奈に消火にかけつけ、帰ってみたら自分の家が焼けていたという話も残っている。また伊奈上宿は前後2回焼けたので打撃が大きく、旧名主の大福家でも現在の家屋は二度の建直しのため、今もって未完成ですとのご当主の話であった。大村の伊奈村が明治大正期、万事に立遅れ気味であったのも、この被災が響いているようである。一方五日市も明治期2度の大火にあっている。とくに二度目の明治16年の中宿焼けは五日市の有力商店の大半が被災した。その後五日市では防火構造の土蔵造りの商家が建てられた。上町和泉屋、鈴木家などがそれである。また出入口の土間に地下穴を掘り、いざというとき家財を投げ込むといった自衛措置を講じた家も多かった。それもこれも現在進行中の道路拡幅工事によって消滅したが何より喜ばしいことは明治16年以降大火に出逢わないでいるということである。

(3) 消防用具の話

(イ) ポンプと玄蕃桶

写真のポンプは旧横沢村のもの。明治13年9月吉日と刻まれ、雲龍水という焼印が押してある。手車で運んだと思われるが、状況によっては肩にかついても手で運ん



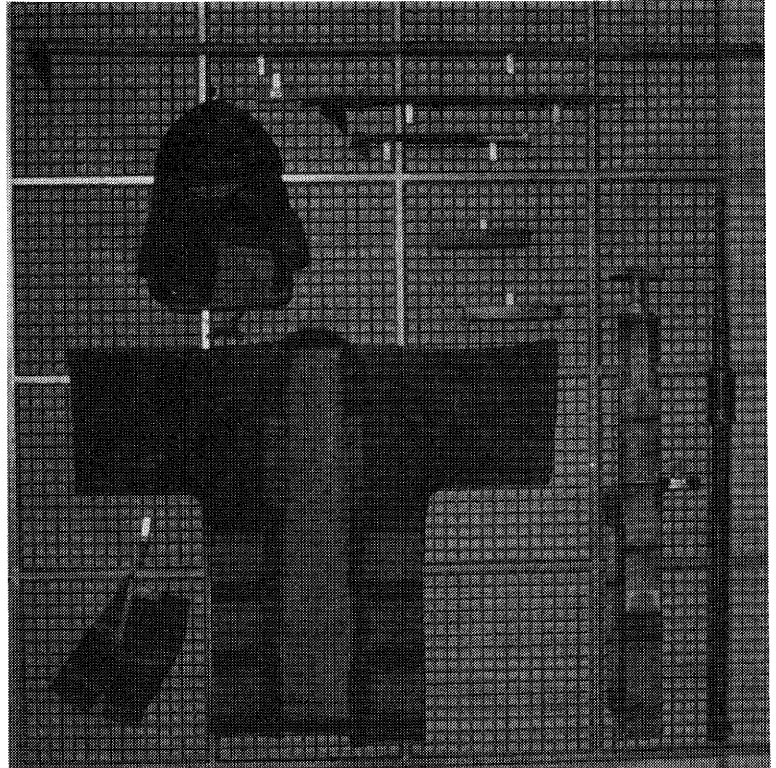
でもよい。水の吐出口はあるが、吸込口はない。手押しポンプとしては初期的な型である。従って専用の水汲み桶が必要になる。当館には旧番場消防団が使用した一部銅張りの大型桶（明治16年11月調製）が寄託されているが、2箇1組でポンプに付属していたという。この桶を玄蕃桶と呼ぶが、玄蕃というのは、おそらく江戸時代の創案者名でもあろうか。なおポンプを「テレキ」と呼ぶ

お年寄りが多い。テレキとはどういう由来の言葉であろうか。調べたがわからない。テレコ（交互・代り代りという大阪方言）ではないかという並木米一先生の説もあるが、ご存知の方のご教示願いたい。伊奈の石川清子さん方に明治初年、伊奈村で消防用具を調達したときの文

書があるが、ポンプ代60円、まとい代40円とある。ポンプに比べ、まといが高いように思えたが、注文製品であるし、神輿と同じくシンボリックな品だから高値も致し方あるまい。横沢のポンプといい、番場の玄蕃桶といい調達年月が、大火のあとというのも興味をそそられる。

(ロ) 鷹 口

写真上部に大中小3本のトビ口が写っている。大は普通のトビ口で、使用度も一番多い。梁の下敷になった人を助けるときなど、テコ棒として使った。櫓の丈夫な柄がついている。中型のトビは畳などつきさしてあげたという。小型は手トビといい、これは一種の指揮棒である。火消しの頭や親分衆が所持したものらしい。五日市消防団長をされた小机晃氏のお話によれば、手トビには金具に金銀を使用したものもあるとか。そういえば最近評判の台東区立風俗資料館で螺鈿をちりばめた高級品をみた。下町の大親分か旦那衆の持物であろう。当地では縁遠い話である。



(ハ) 竜吐水

(家庭用消火器)

写真右側に木製と金属製の消火器具がある。ともに物もちのよい旧家に保存されていて当館でも数本資料として提供いただいた。木製竜吐水の焼判をみると江戸神田の同じ製造元である。恐らく江戸表からやってきた商人が戸別に廻って売り歩いたものであろう。現代でいえば、消防団や農協あっせんの消火器に相当する。現在のものは化学消化器で相応の効果が期待されるが、竜吐水の構造は一種の水鉄砲でわら屋根に火のついた場合など、ものの役に立つとも思えない。しかし荒神様や火ぶせのお札を頼りにするよりは合理性があるかもしれない。とにかく幕末・明治と現代とは紙一重の差、一夜あければ現代といった感が深い。

(ニ) 拍子木

芝居にも使われるので、何やら粋で馴染みの深い道具

である。材料はさくら。さくらは材質が堅くてねばりがあり、澄んだ音を出す。大きさは大小さまざまだが夜警用には自ら使いやすい長さがあつた。

五日市の各町内はつい最近まで住民による夜廻り当番制があつてコタツで聞く拍子木の音は身にしみた。冬の風物詩といたいところだが、当番の順番が気になったものである。夜廻りはめんどうではあつたが町内の露地裏なども詳しくなって連帯感を増した。当番は男とは限らない。ご亭主思いの主婦が着ぶくれて出てきて、廻りながら暗闇でなければ話せない身内話なども交わされた。それやこれやが拍子木の音にしみついているのである。

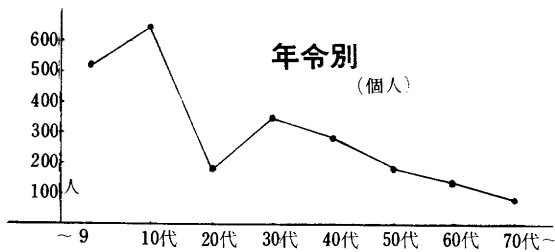
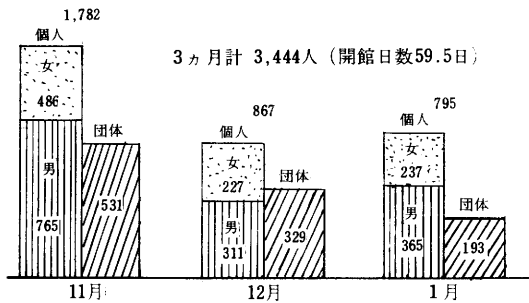
現在公的な消防制度がととのつてきて住民の負担はいちじるしく軽減されたが、合理化の進行によって欠落してゆくもの一大切な何かを思いやる必要もあろう。

入館者の状況

当館は昨56年11月5日開館、本年1月で3ヵ月を経過した。入館者はオープンした11月が多く、以後減少したが、シーズンオフで閉館日の多い年末年始でも月800名の線を保ち、3ヵ月間の総計で3,444名に達した。(幼児は含まない) この間の開館日は59.5日で、1日平均58人になる。最高は217名、最低は0の日もあった。

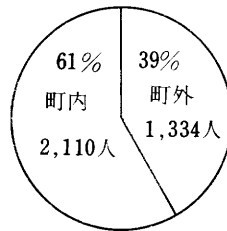
地区別にみると、個人としては町内が多く団体としては町外が多い。ならして6分4分である。町内累計2,110は五日市町の人口2万の10%に当る。3ヵ月で1割の方が入館されたのは多いと思えるが、逆に9割の方がまだ見てられないともいえる。今後のご利用を期待したい。なお、多くの市立博物館等では入館者の7割程度を市内で占めている。町外の多いのは観光地五日市の特色がでているともいえよう。

総数

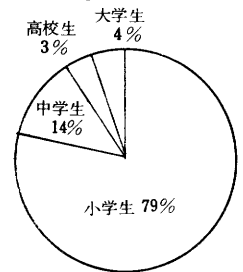


次に予期したことであるが、小学生の入館者が多い。時代の転換期の中で貴重な文化遺産を次代に伝えるという設置目的の一つを果たしていると思う。今後とも学校教育の中に折込んで活用していただきたいと願っている。(S57.2.2)

地域別



学生別 (個人)



感想ノートから



「みたこともない昔のものがいろいろあるのでビックリした。」と書かれると世代の断絶を痛感してしまう。中には「星のことをしりたい。」という要望もある。科学博物館も多摩地区にあってよいのではないかなどと考え込んでしまう。

入館者の感想ノートは3ヵ月で1冊が終ろうとしている。大半が小学生の書き込みで大人はビックリして尻込みされるようである。

- 昔のことがよくわかった
- 昔のくらしは不便そう
- 軍道紙のビデオは面白い

といった調子のものが

郷土館だよりとして「郷土あれこれ」を年2回発行する予定であります。その目的は郷土館の活動状況を町民各位にお知らせすることにあるのですが、館の展示物の紹介解説を兼ねて、五日市の歴史・民俗・自然に関するより深い知識を得る場としたいと考えております。皆さまの興味のあるようなテーマを次ぎ次ぎにとりあげるようつとめますので、ご期待とご協力をお願いいたします。

係

— 表紙題字は郷土館運営協議会委員長並木米一氏 —